



南葵音楽文庫ミニレクチャー

## 『ルバイヤート』を歌う

～スナール室内楽シリーズから (7)

近藤秀樹

2018年11月4日(日) 11:00

はじめに: スナール室内楽シリーズ

南葵音楽文庫  
和歌山県立図書館内  
和歌山市西高松 1-7-38  
tel. 073-436-9500

- ・南葵音楽文庫所蔵の”スナール室内楽シリーズ”から興味深い作品を紹介
- ・今回のテーマ: 『ルバイヤート』仏訳で書かれた歌曲



▲ ジャン・クラース

### 1. 海の音楽家クラース Jean Cras (1879-1932)

\* 「クラ」「クラース」とも表記される。

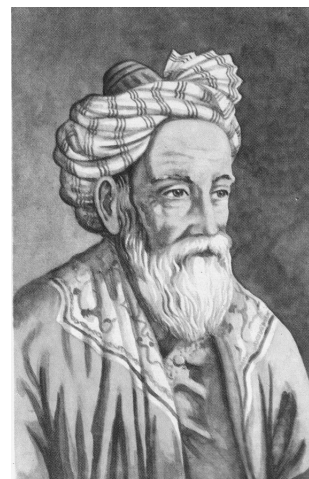
- ・ブルターニュ地方の軍港ブレストに生まれる。
- ・海軍士官学校を卒業、海軍に入る。  
Cf. 作曲家デュパルクとの繋がり
- ・航海術に関する発明を行う (règle de Cras)。
- ・軍務の合間に作曲の筆を執る。
- ・歌劇、管弦楽曲、協奏曲、室内楽曲、歌曲などを作曲。  
→その多くはスナール社から出版。
- ・オマル・ハイヤーム『ルバイヤート』の仏訳から5篇を選んで歌曲集を作曲(1924年)。

### 2. オマル・ハイヤームと『ルバイヤート』

・ルバイヤート: 「ルバーイイ」の複数形。 ルバーイイ: ペルシアの四行詩。風刺性を含む。

・オマル・ハイヤーム(1048-1131)  
11世紀ペルシアの哲学者、数学者、天文学者。  
自由主義的、無神論的傾向。

・ハイヤームの『ルバイヤート』  
厭世的。短い人生を楽しむべきことを説く。  
酒と恋。人生の短さ、虚しさ。  
生前は知られず。反社会的な内容のゆえ?  
19世紀に、英国詩人フィッツジェラルド  
(Edward FitzGerald 1809-1883) が英訳。  
以後、世界的に知られるようになる。



### 3. フランツ・トゥッサンによる仏訳版『ルバイヤート』

フランツ・トゥッサン (Franz Toussaint 1879-1955)



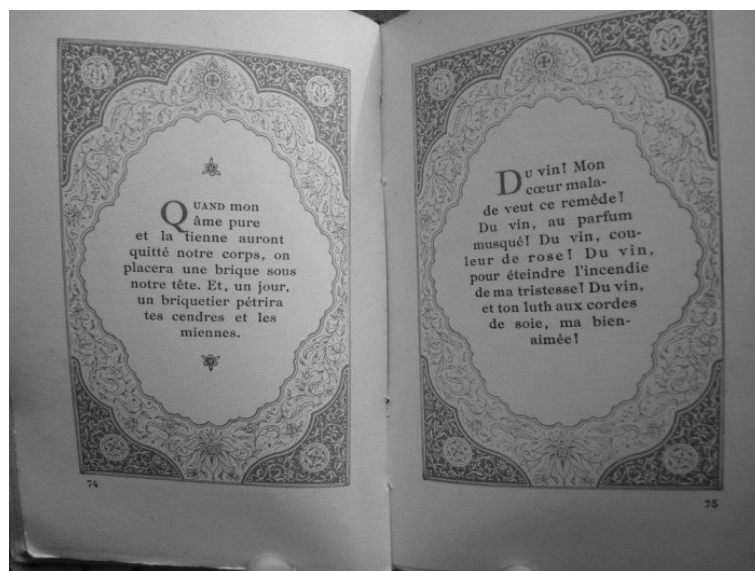
<http://ratatoulha.chez-alice.fr/francais/toussaintfranz.html>

フランスの東洋学者。オマル・ハイヤーム『ルバイヤート』の仏訳 (Omar Khayyâm : *Robaiyat*, 1924) で有名。このほか、カーリダーサ『シャクンターラ』 (Kalidasa : *Sakountalâ*, 1922)、『ヤーマーヤナ』 (*Le Ramayana*, 1927) など、多数の翻訳を行い、『雅歌』や『コーラン』、さらには漢詩 (*La Flute de Jade*, 1920)、日本の「能」 (*La princesse de la lune*, 1923) の翻訳まで手掛けた。その翻訳の多くは Henri Piazza 社から挿絵入りの豪華本として刊行された。『ルバイヤート』も同社の「東邦の奢侈」Ex oriente lux 叢書の一環として出版されたもの。

『ルバイヤート』翻訳の多くはフィッツジェラルドによる英訳からの重訳だが、トゥッサンはペルシア語原典から訳している。トゥッサンはクラスの親しい友人で、歌曲集の作曲にあたっては、両者の間で緊密なコラボレーションが行われたとみられる。

トゥッサン訳『ルバイヤート』。原詩は韻文で四行一連だが、トゥッサン訳は散文訳で、四行に分けず続けて書いている。

<https://www.okazii.ro/franz-toussaint-robaiyat-de-omar-khayam-1940-500-ex-tiraj-ed-bibliofila-a177923256>



#### *Cinq Robaiyat de Omar Khayyam, Quatrains persans du XIeme siècle* オマル・ハイヤームの5つのルバイヤート、11世紀のペルシアの四行詩

##### I.

Chaque matin, la rosée accable les tulipes, les jacinthes et les violettes, mais le soleil les délivre de leur brillant fardeau. Chaque matin, mon coeur est plus lourd dans ma poitrine, mais ton regard le délivre de sa tristesse.

CXXIV

朝が来るたび、朝露がチューリップ、ヒヤシンス、スミレに重く圧(の)しかかる。だが、太陽が花々を輝かしい重荷から解放放つ。朝が来るたび、私の心は胸の裡でますます重くなる。だが、お前の眼差しが心をその悲しみから解放放つ。

\* \* \*

## II.

Pourquoi tant de douceur, de tendresse, au début de notre amour? Pourquoi tant de caresses, tant de délices, après? Maintenant, ton seul plaisir est de déchirer mon cœur... Pourquoi? LXXIII

なぜ、我らが愛の初めは、かくも甘く切ないのか？ なぜ、かくも多くの愛撫と逸樂が、それに続くのか？ そしていま、お前のただひとつの愉しみは、我が心を引き裂くこと.....なぜ？

\* \* \*

## III.

Nuit. Silence. Immobilité d'une branche et de ma pensée. Une rose, image de ta splendeur éphémère, vient de laisser tomber un de ses pétales. Où es-tu, en ce moment, toi qui m'as tendu la coupe et que j'appelle encore? Sans doute, aucune rose ne s'effeuille près de celui que tu désaltères là-bas, et tu es privée du bonheur amer dont je sais t'enivrer. XCVII

夜。沈黙。樹の枝も我が思いも、じっと動かない。一輪の薔薇が、お前のはかない輝きの徴のように、いましがた、その花卉をひとつ落とした。いまこの瞬間、お前はどこにいるのか、かつて私に酒杯を差し出したお前、いまだに私が思いだすお前は？ おそらく薔薇は一つとして散りはしないだろう、いまそこでお前に乾きを癒されている者の傍らでは。けれどもお前は、幸福を奪われているだろう、私がお前を酔わせるすべを心得ていた、あの苦い幸福を。

\* \* \*

## IV.

Quand tu chancelles sous le poids de la douleur, quand tu n'as plus de larmes, pense à la verdure qui miroite après la pluie. Quand la splendeur du jour t'exaspère, quand tu souhaites qu'une nuit définitive s'abatte sur le monde, pense au réveil d'un enfant. CXLVII

苦悩の重荷に拉がれて、もはや涙も枯れたなら、雨のあとの緑の輝きを想うがよい。陽の光のまぶしさにいきり立ち、永遠の夜の訪れを願うときには、子どもの目覚めを想うがよい。

\* \* \*

## V.

Serviteurs, n'apportez pas les lampes puisque mes convives, exténués, se sont endormi. J'y vois suffisamment pour distinguer leur pâleur. Étendus et froids, ils seront ainsi dans la nuit du tombeau. N'apportez pas les lampes, car il n'y a pas d'aube chez les morts. CXLVI

召使たちよ、灯りは要らぬ。食客たちはみな力尽きて眠ってしまったのだから。私には十分によく見えておる、客たちが蒼ざめているかどうか、見わけがつく。彼らは力なく伸びて冷たくなっている、墓の闇のなかでも同じだろう。灯りは要らぬ、死者たちに朝は来ないのだから。

<https://wikilivres.org/wiki/Robaiyat>

訳: 近藤秀樹

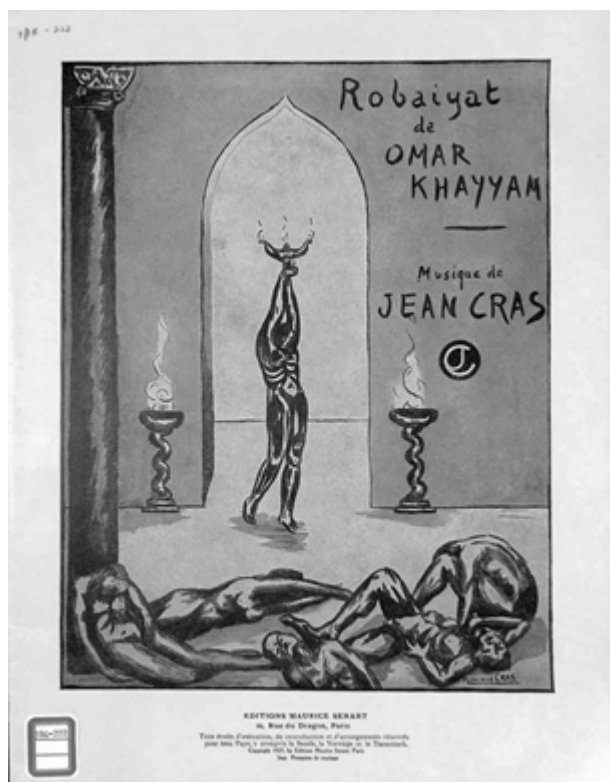
※仏語の詩のあとの番号 [ローマ数字] は、トゥッサン訳の番号。

#### 4. ジャン・クラスによる作曲

クラスが選んだ詩には、不思議と「酒」が出てこない。本来のハイヤームの詩の特徴に乏しいところから、偽作ではないかとの声もある (David Le Marrec の意見)。もとより、ハイヤームの詩として伝えられたものには、かなりの量の偽作が紛れ込んでいると考えられている。

それでも、クラスが書いた曲は、彼の他の曲に比べると暗く悲劇的。たとえば第5曲では、2小節の伴奏型が執拗に繰り返されるが、「死者たちに」*Chez les morts* の直前でふいに途切れて、却ってこの言葉を強調する。また、単調なピアノパートとは対照的に、声は、曲がすすむにつれ、低音域から高音域までたゆまず上昇してゆき、「墓」*tombeau* という歌詞で頂点に達する。

#### 5. 楽譜の表紙と、画家モニク・クラス



クラスの歌曲集《5つのルバイヤート》の表紙は、作曲家の娘モニク (Monique Cras 1910-2007) が描いたもの (当時 15 歳)。

モニクはエコール・ノルマルでチェロを学んだが、職業としては画家を選択。1940-50年代にフランス文化省から派遣され、フランスの植民地、特に北アフリカ、サブサハラアフリカに生活する人々を数多く描いた。

#### ○主要参考文献

オマル・ハイヤーム『ルバイヤート』小川亮作訳、岩波文庫、1971年。

金子民雄『ルバイヤートの謎 ペルシア詩が誘う考古の世界』集英社、2016年。

Omar Khayyaam: *Robaiyat*, traduits par Franz Toussaint, Paris, L'Édition d'art H. Piazza, 1924.

Paul-André Bempéchat: *Jean Cras, Polymath of Music and Letters*, ASHGATH, 2009.

David Le Marrec: Omar Khayyâm et Jean Cras : Cinq Robaiyat ("Serviteurs, n'apportez pas les lampes"), <http://operacritiques.free.fr/css/index.php?2010/03/28/1505-jean-cras-melodies-cinq-robaiyat-d-omar-khayyam-quatrains-khayam-rubaiyat-roubaiyat-timpani-lionel-peintre-alain-jacqou>